

大学まちづくり ～地域共創センターを中心とした取組～

大 歳 恒 彦
(東北公益文科大学 地域共創センター長)

一 はじめに

大学全人といわれる時代を迎えて、特に地方の私立大学は厳しい局面を迎えている。それは、我が国の「地方」といわれる多くの地域が共通に抱えている課題と無縁ではない。むしろ、この数年の間に地方の問題はその姿を顕在化させているといっても過言ではない。市内の旧中心街は平日でもシャッターを閉めた店舗が目立つ。また、大型の店舗や映画館などは店じまいしたり、郊外に転出したりするものが多い。地方の私立大学にもこれと似たようなことが起こっている。若者をはじめとする住民をひきつけるよう

な、小さくとも粹な魅力を持つまちづくりができないだろうか。それは、地方の再生であると同時に、大学の魅力づくり、大学生生き残りのためのひとつの方策でもある。

ここでは、大学に新しく設置した「地域共創センター」を中心とした「学生まちづくりサミット」などの活動をおこなって、大学や学生が地域の方たちと一緒に活動をするようなまちづくりができるか、模索してきた様子を紹介したい。

二 地方大学と地域貢献

著者の学生時代には、大学の地域貢献などはあまり話題

にのぼることがなかった。出身が理系の学部だったせいもあるが、教授たちの関心事は新しい研究をどのように仕上げるかということに集中して、大学の社会貢献の最たるものは、いかに最先端の研究業績をまとめて世間に発表するかということであったと思う。そのため、ひとつの地域の課題について考えたり、取り組んだりするきっかけもあまりなかった。大学の名称そのものが、「・大学前」というように私鉄の駅名になったりしたものの、大学自身が地域を大事にしていたかという点、そうでもないような気がする。しかし、今や時代は変わった。特に地方に進出した大学では、地域の実状に即した人材の育成が大学の大きな使命であり、また地域の課題に取り組むことも期待されている。また、地域はフィールドワークの題材の宝庫であることも確かだ。

東北公益文科大学は、山形県および庄内地域の一四市町村（当時）が資金を提供して施設をつくり、その後は私立大学として運営していく、「公設民営」方式の大学として、二〇〇一年四月に設立された。日本初の「公益学」の創造と実践を教育理念とするとともに、「大学まちづくり」を掲げて出発した。大学設立宣言には、「二〇世紀がモノ・オカネ本位の資本と市場原理の時代であったとするならば、

後の手入れもともに行ってきた。

JR酒田駅から循環バスに乗って約二〇分、庄内空港からもバスで約二〇分。大学に着いて最初に目に入るのが、茶色のレンガ造りの校舎外壁である。背後の緑とも調和するように、最も高い建物でも三階建て、教室棟もほとんどが二階建てとなっており、広い敷地を十分に活用した設計となっている。敷地内には約一七〇名が収容可能な学生寮、体育館や市と共用のグラウンドなどが有機的に配置されている。新しくできたホールは通常約五四〇名（最大約七〇〇名）のイベント開催が可能である。

大学本部棟には立派な玄関があるものの、多くの来訪者は、本部棟につながる新世紀館にある大学食堂（カフェテリア）やメディアセンター棟の図書館などに、そのまま出入りすることになる。ここで、カフェテリアと図書館についてふれておきたい。カフェテリアはガラス張りの窓から木漏れ日が差し込む明るい雰囲気、約四〇〇席を備え、土日祝日や授業のない期間中も営業しているため、一般の市民の方々にも利用されている。また、図書館は、落ち着いた雰囲気、三階建てで、山形県に関する山形文庫など、豊富な蔵書（約一四万冊の収容力）を誇るとともに、インターネットでの情報検索などが可能な約三〇台のパソコン

二一世紀はヒト・ココロ本位の公益の時代でありたい。そのときこそ、子供が子供らしく、人間が人間らしく生きることのできる公益の時代である」という理念が述べられている。また、公益学の特徴として、「人間・自然・地域」を尊重する視点をあげている。

我が国ではなかなか本格的な取組が進んでいないといわれる大学まちづくりを実践するために、キャンパスにも工夫がこらされている。日本海に面する港町、酒田市にある酒田キャンパスは、最上川が日本海に注ぐ河口エリア、出羽富士・鳥海山を望む絶好の環境につくられた。さらに、周辺は美術館、写真家の土門拳記念館、和風建物の生涯学習施設などに囲まれ、文化にあふれる雰囲気がみながっている。このキャンパスの大きな特徴として、学生と市民が自由に交流を行うオープンなエリアとして、門や塀をはじめから設けず、周辺文化施設との調和などにも配慮がなされている。また、まだ小さいが、けやき並木が続くプロムナード、太陽光発電システムをはじめとする自然環境との共生を意識した施設設計など、新しい時代のはじまりにふさわしい創造空間となっている。また、「遊心の森」と名づけられた一角では、多様な樹種の本木が枝を伸ばしている。市民と大学関係者がともに汗を流して植樹し、その

を設置している。図書館も市民への開放を行っており、年間の利用者は学生・市民をあわせて延べ約四万人である。

現在の酒田キャンパスは一学年約二〇〇名、合計千人弱の学生が学習しており、ここを訪れる市民の方々との交流が活発に行われている。また、学生たちもキャンパスからは少し離れた酒田市の中心市街地に出かけていって、酒田のお祭りをはじめとする地域の活動に参加している。

このように東北公益文科大学では、設立の当初から、地域との連携を意識した計画が立てられており、大学の施設を市民開放することがはじめの地域貢献となっており、それは現在でも続いている。

三 地域共創センターの設立

大学では、学びの基本を「公益」でくくられる多分野にわたる理念の構築や実践活動に置いている。このため、学生のなかにもボランティアやNPOなどに興味を持つ者が多く、また大学の教職員や学生のこのような活動への地域の期待も大きい。

大学では、従来教職員や学生たちが地域の方々とともにいろいろな活動を展開してきた。しかし、その活動が必ず

しも一般の市民の方々に明らかにしているわけではない。また、このような活動に参加したいと思った人が大学のどこに行けばよいかわからないということもあった。逆に市民の企画する活動に参加したいと考える学生も全てが連絡の手段を持っているわけではない。そこで、このような反省点をふまえ、二〇〇六年五月に「地域共創センター」を設置することになった。場所は、新しくできた酒田キャンパスのホール内に置いた。センターでは、市民と大学との協働・共創活動の情報の集約を行い、市民と大学とをつなぐ窓口となることを第一の目標とした。大学が中心になって行っている地域活動に興味のある方、またその活動に参加したいと思っっている方に、是非訪れてもらいたい施設である。

地域共創センターでは、教職員と学生がともにセンターのメンバー（センター委員）として対等の立場で活動している。毎週のように開かれるセンター運営会議では、それぞれの活動の様子が報告されるとともに、課題や新しい活動の提案などが行われている。また、学外には、季節ごとに刊行されるセンターのニュースレターである「地域共創センター通信」やホームページ（<http://kyoso.keoeki-u.ac.jp/>）での広報を行っている。

とより、市民の趣味の作品発表の場としても利用されており、これは来訪者の増加に大きく貢献している。当初の三年間は多くの学生や教職員たちが、例えば卒業論文の発表の場として利用したり、さまざまなワークショップの会場となったりしていた。また、地元の県立短大生によるチャレンジショップなども定期的に行われている。いずれも市民の訪問しやすいまちなかにあるという利点をフルに生かした取組であった。このキャンパスを拠点として大学の教職員と市民や地元商店街の方々とのお互いの輪が大きく広がったと言っている。

二〇〇七年五月からは、この街なかキャンパスの活動をさらに発展させたかたちの「まちなか未来研究室」がスタートした。これまでの活動に加えて、新たに「学生のまちなか居住に関する調査研究」をはじめとする中心市街地活性化に関する調査研究や、その他の新規事業が実施されている。居住研究では、実際にまちなかの空き店舗二階スペースにシェア・ハウスの形態で住み始めた学生や中心市街地問題に関心の高い学生を中心に、まちなかの物件の調査・分析、学生の居住ニーズを把握するためのアンケート調査などを実施し、中心市街地の魅力創出の検討を行っている。また、その他の事業としては、商店街のホームページ運営

四 センターを中心とした取組例

地域共創センターを中心とした活動が広がっている。地域共創センターでは、市民や学生向けの無料公開講座である「フォーラム21」の開催や、市内の公共施設の障害者・高齢者などへのバリアフリーの状況の調査をした「福祉マップ」づくり、県内唯一の離島である飛島の「漂着ゴミ・クリーンアップ」など、市内のNPOなどと連携した活動に参加する教職員や学生に協力・支援を行っている。

ここでは、特に学生がまちづくりの課題にチャレンジしている「さかた街なかキャンパス」での活動と二〇〇六年一月に全国に先駆けて開催した「学生まちづくりサミット」の様子を伝えたい。

さかた街なかキャンパスは、二〇〇四年夏に国、県、酒田市と酒田商工会議所の補助を受けて、まちづくりやにぎわい創出のための各種拠点として整備されたもので、中心市街地である中通り商店街の空き店舗（鉄筋コンクリート二階立て、売り場面積約二〇〇平方メートル）がこのために改装された。施設の一階には常設のギャラリーをもうけており、学生・教職員の作品（アートプロジェクト）はも

など、若い教職員や学生の得意な分野における活動が行われている。

「学生まちづくりサミット」は大学が主催し、全国からまちづくりに挑戦している北海道から九州までの一二大学の学生・教職員および県内からは高校生の有志も集合した。二日間にわたって行われたサミットでは、ワークショップにおいて各地域における取組の事例発表やグループ討論などを経て、学生まちづくりに対する意気込みを参加者全員が宣言文として採択した。

以下は、「学生まちづくり宣言in公益大」の一部である。

学生まちづくりサミットでは、学生活動における問題点や課題、事例などの情報を共有し、地域のニーズに応えられるようなまちづくり活動の支えとなる交流を行うことができました。

この交流成果と各分科会の議論を受けて、次の理念を確認します。

△理念▽

- 一、人のために 一、まちのために 一、私たちのために △活動方針▽
- 一 学生まちづくりサミットを通じて、学生まちづくりに

- 二 おける課題を共有していきます。
- 三 全国から継続的に集い共に学びあいながら、学生の輪を広げます。
- 四 学生である間だけの一過性の活動ではなく、継続性のある活動を目指します。
- 五 まちづくり活動を通して、私たちは楽しみます。

サミットの学生実行委員長は終了後の感想として、この会議を通じて多くの発見があったことを述べている。参加したそれぞれの地域でまちづくりに取り組んでいる他大学の学生が同じような課題を抱えていたということ、それは大学と活動団体の関係、後継者問題、地域との連携充実の取組など、地域によって細かい差こそあれ、多くの面で共通の課題があることがあげられている。さらに、自分の大学への



学生まちづくりサミット

思いを新たにしたいという点も感想に含まれている。このサミットに集まった各大学の学生や教職員たちはその後、二〇〇七年二月に関西学院大学で開催された「全国学生まちづくりフォーラム二〇〇七」や同年七月に愛知大学で開催された「全国学生まちづくりサミット二〇〇七in豊橋」などにも中心的なメンバーとして参加している。学生や大学によるまちづくりの動きが具体的な成果としてあらわれて来るにはまだまだ時間がかかるであろうが、参加者からは一様にまちづくりにかける熱い思いと、地域の活動を通して自分自身が大きく成長できたという実感が伝わってくる。今後の大きな展開に期待したいところである。

五 今後の課題

大学と地域との関わり方が大きく変わってきている、現在はその転換点にあるのではないかと感じている。今後、大学と地域との連携がいろいろな分野で進んでいくものと考えられるが、その連携を支援するための拠点としての地域共創センターのような仕組みがますます重要になってくるであろう。まずできることからひとつずつやっていこうということでスタートしたセンターであるが、このような

センターの課題としては、つぎのようなものがあげられる。そのひとつは、教職員や学生の参加をどのように促進していくかということである。教職員も学生も、センターの活動を理解し参加する人数は全体からみればまだまだその一部であり、充分とはいえない。大学に地域貢献や地域活動を完全に根付かせるには、もう少し時間がかかるのかも知れない。また、参加するメンバーも固定化する傾向がある。新しいメンバーの参加による新しい発想や機動力も必要である。

もうひとつは、地域をどう巻き込むか、どう関わってもらうかである。そのためには地域の新たなニーズを知ることでもある。センターでは年に何回か「市民交流ミーティング」を開催し、教職員・学生と市民の方々との意見交換を行っている。このような会合では必ず、参加した市民の方々から貴重な意見や課題が寄せられている。もちろん、多様な意見の全てには対応できないことも事実であり、センターとしてのスタンスを明確に打ち出しつつ、これらの課題に対応する必要がある。

市民の方々と教職員・学生からの意見、課題に少しずつでも着実に取り組んでいくことが大学の地域貢献の実績や、大学の魅力づくりそのものにつながっていくものと信じて

いる。それが地域の再生や活性化に寄与できれば大学そのものの基礎づくりにもなっていくであろう。

今後とも、地域の課題を大学そのものの問題として捉えていく姿勢が重要であり、地域の魅力を再発見しつつ、新しい魅力を作り出し、発信していくことが、大学の新しいひとつの大きな使命になっていくものと考えられる。